

大家の爺さんがオレのところを訪ねてきたのは、松岡の初七日が過ぎた頃だった。

「田坂さん、松岡さんの親御さんにまた会いませんか。こんな物が出てきたので、届けてやって欲しいのだけど」

メリヤスのシャツにステテコ姿の爺さんからは、酸っぱいような汗の匂いがした。渡されたのは、驚くほど少女趣味なノートに松岡が書き残した日記だった。パラパラとめくってみると『苦しい……』という文字が目に見えび込んできた。

「あ、わかりました。オレ届けます」

爺さんは首を左右に振り、首から回した手で肩を揉むようにしながら帰っていった。

「読んだな。とオレは思った。」

オレと松岡は入学の時にひよんな事で知り合つて以来、無二の親友の仲だった。それが突然、オレは松岡を憎悪するようになる。オレのどす黒い嫉妬が原因だった。

松岡は、甘いフェースに爽やかな弁舌があり、合コンをすればすぐに女たちが群がった。頭が良く、さして苦勞もせず、この就職難の時代に超一流企業の内定を早々と決めていた。まさかの中小企業にまで振られてしまうオレとは大きな違いだった。しかし、松岡は何があつても偉ぶることはなく、とにかくいいやつだった。

悔しいほどいいやつだった。

直接の引き金となつたのは、由美の事だった。

モテないオレにとつて由美は唯一の彼女だった。バイトでコンパニオンをこなす彼女の見てくれは、オレには過ぎたものだと思つていた。オレは由美を失うのが怖くて、このことだけは松岡にも話せずにいた。

「卒業後のことも考えなくちゃならないし、あたしねえ、そろそろ自分の生活変えなくちゃなあつて思つてるの」

オレの他にもつきあつていゝヤツがいる事は知つていたが、オレにもプライドがあつてそのことは聞けずにいた。由美の女友達から由美が松岡とつきあつていゝ事を聞くと、オレは完全にブチ切れた。だが、男の

嫉妬は冷たく燃える。オレは松岡に気づかれないように親友の関係を続けていた。

信じてくれないだろうが、オレは幼い頃から靈感が強く、よく霊を見た。だが、オレが霊を見たというと、大人も子供もオレの事をバカにした。さらにいい張ると最後には嘘つき呼ばわりまでした。だからオレは自分の見えるものの事を人には話さなくなっていた。

大学から下宿に向かう途中に一ヶ所どうしてもいやな場所があつた。竹やぶの切り通しを抜けた所に一時間に二本くらいローカル線が通る小さな踏み切りがあつた。そこにいやなヤツが立っていた。初めて見た時、オレにはそいつの正体がすぐにはわかつたので、それ以後は遠回りをして下宿に帰るようにしていた。

夜中の二時ごろオレは決心してその踏み切りに向かつた。思った通りそいつはまだそこに立っていた。そいつは男で、ジャージーに白いTシャツ姿。まるでディスクの青白いストロボに照らされたように、ぼんやりと暗闇の中に浮かび上がっていた。

近づくと、実体と同じ細かい所まで見る事が出来た。足はちゃんとあり、ぼろのスニーカーをなぜか片方だけはいいていた。髪の毛も、うつすらと生えた髭も、指の爪の一本一本まで、はつきりと見えた。ただ、そいつはオレを見ていなかった。どんなに近づいてもどこか遠くを見るような目をして、オレに反応を示さなかった。

しかし、思った通りそいつはオレにくつついて来た。翌日、夜中の二時過ぎに、オレがラップ音が鳴ったような気がして目を醒ますと、下宿の部屋の隅に青白いスポットライトを浴びたようなジャージーにTシャツ姿の男が立っていた。オレはそいつを無視すると毛布を引つかぶって眠ろうとした。すると今度は明け方近くに、オレの両足を押さえてきた。ずしりと重たいものがオレの両足の上に乗って、すねの辺りをゴンゴンとたたたく。

「痛い、痛い。オレの足に乗るのはやめろ」

必死で叫ぶと、まるで空気が入れ替わったかのようにいつのも下宿の自分の部屋が現われて、オレが独りでそこにいるだけだった。

翌日も、その翌日も、そいつはオレの部屋にやって来た。一度などは

目をあけると、そいつの顔が寝ているオレの目の前にあつた。しかし、目だけは相変わらずオレをつきぬけてどこか遠くを見つめていた。

さすがにオレもやつれてきた。目は落ち窪んで隈ができて、頬がげっそりと抜けてきた。そこで、オレは下宿に松岡を呼んだ。

翌日は休みとあつて、夕方からビールを空け、コンビニで買った弁当をつまみに、焼酎、ウイスキーと進んだ。夜中を過ぎるとオレも松岡もへべレケになり、せんべい布団を引つ張り出して、ありあわせの毛布をかぶつて寝た。

何時間たつただろうか。オレは松岡のうめき声で目を覚ました。

横で寝ている松岡の上には青白くぼんやりとした男の姿が立っている。それを見たオレは、久しぶりに胸苦しさを覚えることもなく、朝までぐっすり眠る事ができた。婆さんが高野山でもらつたお札でも無いよりはましだつたらしい。

「おーい、田坂」

後ろから呼び止める声があった。

「なんだ松岡じゃないか。最近見なかったけど、どうしたんだ」

「いや、なんか体調がさえなくてさ」

松岡の目の下にはくつきりとした隈ができていた。

「大事にしろよ。おれは相変わらず職探した。しばらくつきあえないが、ごめんな」

「そうか、じゃ、お前も頑張れよ」

いつものように松岡はいいやつだった。その松岡の首の周りには後ろからしつかりと腕がまわされて、おぶさるようにした男の顔が横からのぞいていた。オレは、霊を背負ってキャンパスを歩いていく松岡の後姿を見送っていた。

最後にオレが松岡に会ったのは、県立病院の集中治療室だった。松岡は実家にも帰ろうとしたのか、友人から車を借りて、県道から高速道路のインターチェンジに向かう途中、事故を起こした。なぜか警察から連絡があり、オレはビニールのカーテンの中でチューブだらけになった

松岡を確認した。カーテンの外に立ったあいつもしつかり松岡を見守っていた。

翌日、松岡は死んだ。オレは急いで田舎に帰ると、知り合いの住職に頼んで、あらん限りのお払いをやってもらった。松岡の葬式には、体調を理由に出席しなかった。

由美と復縁して、何とか就職も決まった。オレは絶好調となり、由美との仲も前より深まった。この日も由美が父親から就職祝いに買ってもらったという軽自動車に乗って、郊外のモーターにしけ込むと、粉も出なくなるまでやりまくった。やがて由美の門限が近づいたので、オレ達は急いで家に帰る事にした。オレは運転ができないので、道の事がよくわからない。由美の運転で車は高速を降り、知らないうちに松岡が事故ったところに向かっていた。

オレにはその姿がすぐにわかった。松岡は青白く光りながら、中央分離帯にひぎを抱えて座っていた。由美の車がその脇を通り過ぎた。振り

返るとそこにはゆつくりとしたストロークで追いかけてくる松岡がいた。  
「おーい、田坂待つてくれ。オレだよ」

オレにはそう叫ぶ松岡の声が聞こえるような気がした。やがて松岡は車に追いつくと、いきなり窓から乗り込んできた。窓にはバリバリと電光が走り、硫黄のいやな臭いがした。後ろから松岡が抱きついて冷たい頬をすり寄せてきた。

「キヤーツ、何なのこれ」

由美が叫んだ。車は急にコントロールを失って吸い寄せられるように中央分離帯に向かった。やがてガラスにひびが入り、オレの目の前に白いエアバッグが広がっていった。

「おーい、田坂、いっしょに行こう」

あいつは死んでもいいやつだった。